きつねとくま　　岡山県

ある山奥で、きつねとくまが会いました。きつねがくまにいいました。
「どうも近頃、いい獲物がないなあ。おれ、いいこと考えたんだけど、相談に乗ってくれないか」
「どんなことだい」と、くまがきくと、きつねは、
「おれがいつも通るとこに、原っぱがあるんだ。そこをたがやして畑を作って、おいしい野菜を作ろうと思うんだけど、どうだろう」といいました。
「そりゃあ、いいなあ。じゃあ、やろう」
きつねとくまは、さっそく、原っぱに行きました。きつねはいいました。
「くまさん、あんたは、体も大きいし、つめも丈夫だから、ここの土を掘ってくれ。おれは、里に行って、種を手に入れて来るよ」
そこで、くまは、木の切り株や草を引っこ抜いたり、土を掘ったりして、畑にしました。きつねは、里にひとっ走りして、種を盗んで来ました。
種をまき終えると、にひきは、ひと休みしました。きつねは、
「くまさん、くまさん。まいた種はじきに大きくなるぞ。後でけんかにならないように、初めに、どちらがとるか、決めておこう」といいました。
「うん。それがいい」
「そんなら、おれからいうぞ」
きつねは、
「おれは、土から下のものをもらう」といいました。くまは、
「それなら、おれは、土から上のものだな」といいました。
やがて、畑には青々と芽が出て葉っぱがどんどん大きく茂りました。きつねとくまは、そろそろ取入れの時分だと、畑にやって来ました。
「さあ、くまさん。約束だから、あんたは土の上の葉っぱを取りな。ついでに土を掘り返しておいてくれないか」
くまは、おいしそうな葉っぱをどっさり取って、ついでに土も掘り返してやりました。そして、大よろこびで葉っぱを抱えて穴に帰りました。きつねは、くまが掘ってくれたかぶを、一本ずつ自分の穴に運びました。

くまは、穴にもどると、葉っぱを、「うまい、うまい」といって食べました。ところが、次の日になると、葉っぱはみんなしおれてまずくなっていました。くまは、きつねはどうしているだろうと思って、行ってみました。

「きつね君、きつね君、どんな具合(ぐあい)だ」といって、のぞくと、きつねは、穴の中に白い丸いものをいっぱい入れて、おいしそうに食べています。

「きつね君、そりゃ、何だ」

「これはかぶだ」

「うまそうだなあ。おれのは、みんなしおれちゃったぞ」

「あんたのは葉っぱだから、二日も経てば食えんようになる。当り前さ」

くまは、

（きつねのやつ、だましやがったな）と思いましたが、しかたがありません。

「きつね君、そのかぶひとつくれないか」というと、きつねは、

「初めの約束だもの、やらないよ」といいました。くまは、ぷりぷり怒って帰って行きました。

ある日、きつねがくまの所にやって来て、

「くまさん、もう一度、畑で何か作ってみようよ」といいました。くまは、（今度こそ）と思って、

「よしやろう」といいました。

くまは、畑をたがやし、きつねは種を取って来ました。今度は、くまが先に、

「おれは、土から下のものをもらうぞ」といいました。きつねは、

「そうか。そんならおれは、土から上のものだな」といいました。

やがて、日がたって、にひきは、畑にやって来ました。きつねは、土から上のものをどっさり抱えて穴にもどりました。くまは、土を掘ってみましたが、小さな根っこばかりがありました。

くまは、怒って、きつねの所に行きました。きつねは、穴に青い葉っぱをしいて、その上に赤いいちごをどっさり並べて、おいしそうに食べていました。くまは、

（まただましやがったな）と思いましたが、しかたがありません。

「きつね君、いちごをひとつぶくれないか」というと、きつねは、

「約束だもの、やらないよ」といいました。くまは、かんかんに怒って帰って行きまし

た。

ある日、きつねがくまの所にやって来て、

「くまさん、くまさん。まだ怒っているかい。あれは、約束のせいなんだから、もう怒らないで、昔のように仲良くしておくれよ」といいました。そして、

「きょうは、おわびのしるしに、いい事を教えに来たんだよ。おれといっしょに来ておくれ」といいました。くまは、きつねについて行きました。

笹(ささ)やぶの所まで来ると、きつねは、いいました。

「あそこを見てごらん。大きなはちの巣があるだろう。あんたにはちみつをあげようと思ったんだ」

くまは、

「こりゃあ、おれの大好物だ」といって、やぶの奥に入っていきました。すると、みつばちが怒って、ぶんぶん飛んできてくまにたかりました。くまが払いのけようとすると、みつばちは、なお刺しに来るという具合で、くまが困っているあいだに、きつねははちみつをみんな取って帰ってしまいました。

くまは、ますます腹を立てて、今度はどうしても仇(あだ)を討(う)ってやろうと、きつねが来るのを待っていました。

ある日、くまは、馬をつかまえて食べていました。そこへ、きつねがやって来て、

「おや、くまさん。きょうは、たいへんなごちそうだね。少しおくれよ」といいました。

くまは、

「いいよ。おあがり」といって、きつねに肉を少し分けてやりました。それがとてもおいしかったので、きつねは、

「なんと。これは、どうやってつかまえるんだ」とききました。くまは、

「これか。これをとるのは訳(わけ)ないことだ。おれより、あんたのような体の小さい者のほうが、うまく取れるよ」といいました。

「どうやるんだい」

「ここから山を越えると大きな川がある。その川のそばに大きな原っぱがあって、馬がいっぱいいるんだ。馬が寝ているすきに、馬の後ろ脚に食いつくと、馬は弱って倒れる。馬のしっぽをあんたのしっぽに結びつけておいたら、早く馬が弱るよ」

きつねは、さっそく、山を越えて川のそばの原っぱに行きました。なるほど、馬がた

くさん寝ころんでいました。きつねは、太った大きいのを見つけて、こっそりしのびよりました。そして、馬のしっぽを自分のしっぽに結びつけてから、はずみをつけて、いやというほど馬の後ろ脚にかみつきました。馬は、びっくりして、ヒヒヒンと立ち上がって、くるくる回って、きつねをぶん回しました。きつねは目を回して、しまいにはしっぽがポンと抜けて、きつねは向こうの山まで飛んで行ってしまいましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『昔話研究一』民間伝承の会